

で、午前9時半から夕刻5時すぎまで、まず試験成績の報告と検討、ついで中央委員による実用化の判定という順序で会議が持たれた。検討会の結果は別表に示すとおりで、除草剤では対象作物13、試験薬剤18で計35種類の試験が行なわれ、生育調節剤では5種類のそ菜を用

い4種の薬剤が試験された。試験成績の内容とその要約は別に配布された印刷物にくわしいが、判定の結果は実用化が8、実継が2、継続20、継続?が7、中止が2であった。以下作物ごとに試験の種類と判定の結果およびその理由を述べてみよう。

検 討 会 結 果 一 覧 表

実	判 定				内 容 ま た は 判 定 理 由
	実	継	継?	中止	
		○			対象作物をしほってさらに検討する
○					定植1週間前の30cc/a全面処理
○					は種後土壌処理125~150cc/a
		○			低薬量について再検討
		○			試験年次不足につき継続(広葉への効果不足)
○					活着後株間処理50~60g/a
		○			試験年次不足につき継続
		○			試験例数不足につき継続
	○				砂壤土にかぎり植付14日前50倍1リットル(重粘土については薬量、処理法など再検討)
	○				生育期(秋期)処理60cc(春期処理については再検討)
		○			試験年次不足につき継続
		○			試験例数不足につき継続
		○			同 上
			○		全般に効果不足、薬害もあるので再検討
○					は種後土壌処理100~125cc/a
				○	は種後土壌処理125~130cc/a(すでに実用化) 生育期処理(前回同様成績不良)
		○			試験例数不足につき継続
		○			より高薬量または混用について再検討
		○			薬量、処理時期について再検討
		○			試験例数不足、結果不一致につき継続
		○			同 上
○					生育期雑草処理40~50g/a
		○			結果不一致につき再検討
				○	薬量、処理時期について再検討
			○		薬害が大きいの中止
		○			結果不一致につき再検討

対 象 作 物		薬 剤 名	有 効 成 分 お よ び 含 有 率
13	タマネギ(本畑)	S - 4 1 6 0	O-メチル-N-(4-アミノベンゼンスルホニル)カーバメート 50% 水和剤
	"	CNP(MO-338)	前 掲
	"	MO - 3 3 8	前 掲
	"	H - 6 6 9	尿 素 系 50%
14	チューリップ	MUPC(アリプール)	BIPC:前 掲 10% COMU:N-シクロオクチル-N'-ジメチルウレア 15% 乳剤
	"	CAPC(アリセップ)	前 掲
	"	シ メ ト リ ン	前 掲
	"	MCC(スエップ)	前 掲
15	ユ リ	MCC(スエップ)	前 掲
2-1	キュウリ	2, 4, 5, - T E	2,4,5-トリクロルフェノキシ酢酸イソプロピルエステル 3,6% 乳剤
	"	B C B	ブロムコリンブロマイド
	"	TO - Z - 1 0 7	コリン系 水溶粉剤
2	そ 菜 一 般	ア ル ギ ッ ト	

一 除 草 剤

1 そ菜一般

(1) MCC(スエップ)(日産化学, 日本農薬申請): 継続

スエップはカーバメート系の薬剤で, 土壌処理による抑草作用と, 雑草処理による枯草作用とを兼備する非ホルモン型の接触型兼移行型除草剤とされ, イネとノビエ・メヒシバとの間に属間選択殺草性があるので, 乾田直はん, 陸イネ, 畑苗代で実用化・登録されている水和剤である。この試験はそ菜類についての適用拡大の基礎試験で園試および園試久留米支場において行なわれた。両場所ともに, は種後土壌処理と生育期雑草処理とを行なった。園試では, ハクサイ, ホウレンソウ, キュウリ, エンドウ, タマネギ, ニンジン等材料として試験したところ, ニンジンに対するは種後処理が, 初期の生育抑制を若干認める程度でやや有望と思われるほか,

すべて著しい薬害が認められ, いずれの処理法, 処理薬量ともに実用性は認められなかった。除草効果は土壌処理 70 g/a で中程度, 100 g で大きく, 生育期処理は 70 g できわめて大きな効果を収めた。園試久留米ではハクサイ, ホウレンソウ, エンドウ, ソラマメで試験したが, は種後処理ではエンドウ, ソラマメに全く薬害を認めず, ハクサイとホウレンソウは薬害大, 除草効果は 70 g でも著しく大との結果を得, 生育期処理では, ソラマメの 70 ~ 100 g/a 処理以外はいずれも薬害大で実用化の望みはないとの結果が得られたが, 除草効果は 70 g/a で著しかった。

両者の成績は, マメ科については反対となっており, その原因は明らかでないが, ニンジン, ソラマメ, エンドウなどは種後処理, ソラマメの生育期処理が一応有望との結果が得られた。また除草効果は 70 g/a でも十分と考えられるので, それ以下の薬量(特に生育期)も含め, 有望そ菜を中心に試験を継続すると判定された。

判 定					内 容 ま た は 判 定 理 由
実	実 継	継	継 ?	中止	
○					活着後および生育期各 30g 2 回処理
			○		結果不一致につき、高薬量か 2 回処理につき再検討
		○			薬量、処理時期について再検討
○					活着後 18g および生育期 12g の 2 回処理
			○		(新潟の成績をまっして在京委員で検討)
			○		同 上
			○		同 上
			○		同 上
		○			試験年次不足につき継続
		○			試験例数不足につき継続
○					(土) $5 \times 10^{-4} \sim 10^{-3} M$, (れき耕, くん炭) $1 \sim 5 \times 10^{-4} M$
		○			試験年次・例数不足につき継続
		○			同 上

2 カンラン

- (1) パラコート(グラモキソン)(I. C. I. 日本農薬・武田薬品申請): 定植 1 週間前の全面処理 30cc/a で実用化

この薬剤はすでに各種作物で実用化の判定を受け、登録されたものも少なくないが、この試験は登録範囲拡大のために申請された。試験は園試久留米支場で実施され、他の試験の場合と同様、作物体にかからなければ薬害なく、幼小雑草に対する殺草力顕著と認められて、上記のような判定を得た。

3 ハクサイ

- (1) CNP(MO-338)(MO普及会申請): は種後土壌処理 125~150cc/a で実用化

CNP は NIP に類似した作用特性を持つ接触型の薬剤で、植物の発芽時に強い作用力を持

つほか莖葉吸収でも作用力が大きく、土壌処理の場合スズメノテッポウには殺草力が大きいがノミノフスマにはほとんどきかないという選択性がある。すでにイネ(水田)で登録され、そ菜でも実用化試験として申請されたものである。園試盛岡支場、岐阜農試、兵庫農試、広島農試可部園芸支場で試験されたが、対照薬剤である NIP でやや薬害を認めたのに対して MO-338 は薬害なく、特にハコベに対する効果でまいった。イヌガラシに対しては効果が薄い(園試盛岡支場)とみられたが、125cc/a 以上では全般的に殺草効果高く、他作物・そ菜での従来の試験結果ともあわせて実用化と判定された。

- (2) MO-500(三井化学申請): 継続

新ジフェニルエーテル系の化合物で MO-338 の作用性をさらに高めたものである。非ホルモン系でやや移行性のある接触型といわれ、殺草作用の発現には MO-338 同様光を必要とする。園試盛岡支場(ほかに実施中 8 場)で試験を担当し、イネ科、広葉の両種雑草に効果高く、

殺草力は十分であったがハクサイに対する薬害も著しく、20～60ccの薬量では実用性はないと判断された。しかし新規申請であり、殺草効果は十分なので、低薬量あるいは他の作物への効果について試験を継続することにされた。

4 レタス

- (1) TCAA (トリクロルアセトアミド・東亜農薬申請) : 継続

TCAA類似の、イネ科、カヤツリグサ科雑草に有効な土壌処理剤で、広葉雑草およびマメ科を除く作物には作用性が少ない。また莖葉接触作用は少ないが、発芽時に特に効果的である。

レタスに対する除草剤としてはトリフルラリン、SLHなどが知られているが、作型の複雑なこともあっておのおのに安定した効果をもつ薬剤が求められている。この試験は千葉暖地園試、神奈川園試三浦分場、広島農試可部園芸支場で定植前または同後処理として行なわれたが、申請者の資料にあるとおり、イネ科に対しての殺草効果は高いが広葉に対しての効果がなく、千葉ではイネ科優占の水田裏作で利用を期待できるとしたが、広島ではトリフルラリンに比し実用性劣るとした。新規の申請であること、広葉に対する効果を補う混合剤の検討が必要などの点から継続となった。

5 トマト

- (1) SW-6701 (三共申請) : 活着後株間処理 50～60g で実用化

フェノキシピリダジン化合物を主成分とする薬剤で、春夏作につづいての試験である。根部からの吸収による作用力が強く、莖葉処理によ

る接触効果はほとんどない。したがって生育初期以後の雑草には効果が低いが、草種別にみるとイネ科雑草はほぼ各草種ともほとんど完全に防除し、広葉雑草には抑草力はあるがイネ科に対するよりは劣るという特性を持つ。またハコベにはやや弱く、ノミノフスマには特に強いと報告されている。奈良農試と山梨・岐阜・京都・兵庫農試において活着後株間処理で試験され、薬害はなくイネ科に対する除草効果大、早春の雑草に対して効果が高いとの成績が得られた。春夏作でも結果がよかったが、40g/aではやや殺草力が劣ると観察されたので、50～60g/aで実用化と判定された。

- (2) SW-6721 (三共申請) : 継続

SW-6701が50%水和剤であるのに対して、この薬剤は25%乳剤という相違があるだけである。新規申請であるため、山梨農試と奈良農試で試験され、ハウストマトについては薬害なく増収をもたらし、クデなど早春雑草に効果があると判断された。しかし試験年次不足の理由で継続となった。

6 ピーマン

- (1) SW-6701 (三共申請) : 継続

トマトと同様の薬剤で、栃木農試、佐野分場と三重農試で試験された。活着後株間土壌または雑草処理の結果、土壌処理ではカタバミ等の宿根草を除いて全体に除草効果が高く60g/a以下で有効、雑草処理も80～90g/aを使えば効果を期待できる(栃木)との成績を得た。しかし全体として試験例数が不足なので、現在進行中の成績も合わせてさらに検討を重ねることと判定された。

7 イチゴ（苗床）

- (1) **NCS**（東京有機，三洋貿易申請）：実継・砂壤土に限り植え付け14日前処理50倍液1ℓ/m²で実用化（重粘土については，薬量，処理法などをさらに検討する）

N-メチルジチオカルバミン酸アンモニウムで，すでに土壤殺菌剤として登録されている（カーバム剤）。土壤中でガス化し雑草種子および浅い表土部分の植物体をも殺すとして，すでにネギ，タマネギ苗床で実用化され，使用対象作物拡大の試験である。原液を所定濃度に希釈し，ジョウロで苗床にまき，直ちにビニル等で被覆，7日後これを除去し，浅く耕起してガス抜きし，さらに7日後に苗を移植するという処理を行なった。すなわち土中の種子を殺すのであって選択性はなく，6～7cmの土層中の種子に効力が及ぶという。園試，栃木農試，埼玉園試，静岡農試，兵庫農試宝塚分場で試験を行ない，除草効果については，いずれの試験場とも高い実用性を認めたが，イチゴ苗への薬害については結論が二つに分かれた。すなわち園試，栃木，埼玉では薬害を認めず高い実用性ありとしたが，静岡，兵庫では活着遅延が著しく良苗が少ないので実用性が低いと結論した。両群の試験条件を比較検討した結果，土壌の性質に原因があるものと考えられ，しょく壤土などの地帯（静岡）ではガス抜きが容易に進行しないため残留ガスの薬害が苗に出ると判断された。したがって共通的に良い成績を収めた試験場のほ場土壌である砂～砂壤土においては50倍液1ℓ/m²で実用化が可能とし，粘質土についてはガス抜きの方法をさらに検討するか薬量につい

ての試験をすることになった。しかし定植の2週間も前に処理せねばならないというのでは，実用性ありとしても現実性が乏しいとの批判があり，その点は普及段階の問題にすることとなった。

8 イチゴ（本畑）

- (1) **CMMP**（ダクロン）（中外製薬申請）
：実継・生育期（秋期）処理60cc/a
で実用化（春期の処理については，さらに検討する）

ダクロンはすでにトマト（直はん，移植栽培），ニンジン（生育期）で登録されている。したがって適用作物拡大の試験であるが，この酸アミド系非ホルモン型の薬剤は接触型で，トマトとニンジンに対して生化学的選択性を持つほか体内移行性がないので局所的に強力な殺草作用を示す，残効性が高いなどの特性をあげられている。しかし今までの試験で常に問題となってきたのは雑草の生育段階と処理適期の関係であり，一応草たけ5cm以下であればきわめて有効，大きくなっても10cm以下であることが必要であり，その間においては生育程度に応じ薬量を増さねばならないとはされているが，試験場の担当官であってもとにかくその適期を失しやすいという難点があった。適期を失すれば当然効果が低いと判定されるが，それは薬剤の責任ではないといえるし，反対にそのように適期を失しやすいというのでは実用場面で利用性が低いともいえるのではないかという意見がある。このような背景のもとに，園試，埼玉園試，静岡農試，兵庫農試宝塚分場，福岡園試で試験が行なわれたが，活着後雑草2～3葉期に行なう秋期処理では，薬害無く高い除草効果を認めたが（イネ

科にやや劣る)、春期の雑草処理を再度行なうと薬害を生じ、初期収量の減ずる傾向が認められた。雑草への効果について今回は従来のような混乱はなかったが、イチゴについては、それが春期に再生長期を迎える頃の処理であると薬害を生ずるおそれがあることがわかった。したがって前後の処理について実用性を認めたが、その残効の持続性についてやや懸念する担当者の声もあった。

(2) SW-6701(三共申請):継続

薬剤の性格は前述のとおりであって、圃試興津支場、埼玉圃試、静岡農試、兵庫農試宝塚分場、福岡圃試、佐賀農試が試験した。処理は活着後または春期マルチ前土壌処理および両者の組み合わせで行なわれたが、いずれの処理においても薬害を認めず、除草効果については前述した試験の場合同様、タデ類以外には顕著な効果があり、特にイネ科雑草に著しかった。各試験場とも実用性ありと判定したが、試験年次不足(新規試験)なので継続とされた。

(3) TDW-6643(東亜農薬申請):継続

ジオカーバメート誘導体で「カバック43」としてイネ(水田)用に実用化され、広葉のほうに作用性大であるが残効性がきわめて短かい点から、そ菜での利用拡大試験が試みられたものである。雑草の根および幼芽部より吸収されて作用するが莖葉処理での効果は少ないので、活着後またはトンネル前土壌処理が行なわれ、圃試が担当した。除草効果はかなりあったが反復によっては効果の劣る部分があり、トンネル前処理ではやや収量の減ずる傾向もあったが、全体としては薬害が少ないと認められた。試験

年次不足につき継続となった。

(4) TDW-39(東亜農薬申請):継続

「カバック39」の名で水田用土壌処理剤として実用化されているもので、適用拡大試験である。前項薬剤との比較が試験目的の一つであったので、同様に圃試が担当した。処理も同様に行なわれたが、ほぼTDW-6643と同じ成績となり、継続と判定された。

(5) S-4159(住友化学申請):継続?

カーバメート系の薬剤で、土壌処理剤で芝生用に実用化されたほか、畑用として効果ありとされている。三重農試、京都農試丹後分場、岡山農試で活着後または春期生育期処理として試験されたが、全体として除草効果が十分でなく(対照のCATに劣る)、特に広葉に対する効果が劣るので、この試験濃度の範囲(40~80g/a)では期待が薄いとされた。また生育期処理では薬害も生じたので、積極的な利用には疑問ありという意味で継続?となった。

9 ダイコン

(2) CNP(MO-338)(MO普及会申請):は種後土壌処理100~125cc/aで実用化

前述した薬剤であるが、適用作物拡大の試験である。埼玉圃試入間川支場、神奈川圃試三浦分場、三重農試、徳島農試というほ場の性質・品種を異にする場所で試験を分担した結果、薬害は150cc/a以上で生育抑制が起こるがそれ以下では問題なく、除草効果については対照のプロメトリンに劣るとか、全体に高くないなどの意見もあったがほぼ利用可能の程度とい

う結論に達し、100～125cc/aで実用化と判定された。この薬剤は総じてアブラナ科のそ菜に利用性が高いようである。

10 ニンジン

- (1) CNP (MO-338) (MO普及会申請) : 中止

前年度には種後処理と生育期雑草処理による試験が行なわれ、前者については実用化、後者は薬害があって継続の判定が与えられた。今年度の試験は実施場所を変更して、園試興津支場、埼玉園試、同入間川支場、広島農試可部園芸試験場、福岡園試で行なわれた。その結果、は種後処理は前年同様125～150cc/aで良い成績をおさめたが、生育期処理については効果の点でも薬害の有無でも成績が一致せず、担当者の評定もまちまちとなった。したがって兩年とも同様の結果となり前者処理についてはすでに実用化となっているので、試験中止と判定した。

- (2) MO-500 (三井化学申請) : 継続

前述の薬剤であるが、予備試験として園試興津支場で実施した結果、は種後処理(20～60cc/a)では20cc/aでも十分な除草効果があり、生育期処理は顕著な薬害で実用化のみこみなしとの成績を得た。しかし、新規試験で試験例数不足なので、薬量ほかにつき継続と判定された。

- (3) S-4159 (住友化学申請) : 継続 ?

前述の薬剤で、埼玉農試入間川支場、岡山農試で試験されたが、イネ科には有効なのに反して非イネ科には効果なく、その点では実用性が疑問であったが、薬害もないので、より高薬量

(80g/a以上)で試験するか、非イネ科に有効な薬剤との混用を検討するということで継続?となった。

11 ネギ (苗床)

- (1) CAPC (アリセツプ) (北興化学申請) : 継続

BIPCとPCAの混合剤で、すでにタマネギでは試験されてきたが、並行的にネギ苗床でも用途拡大の試験をしたものである。根部および莖葉の両面から吸収され、特に浅根性の広葉雑草に有効とされている。雑草の子葉期か発芽時が最も効果大であるというが、ネギの生育期を考慮して雑草2～3葉処理で試験した。その結果各処理区とも薬害はなかったが、試験場の一つ岩手園試ではイネ科に対する効果が十分でなく、非イネ科優占のほ場で有効とし、他の一つ埼玉園試では除草効果なしとした。結果が不一致なので、試験場所数を増して薬量、処理時期を再検討するよう継続と判定された。

12 タマネギ (苗床)

- (1) TDW-39 (東亜農薬申請) : 継続

前出の薬剤の適用拡大試験であるが、園試盛岡支場、和歌山農試がは種後土壌処理で担当した。盛岡ではイネ科に対する除草効果がまさり、100～140cc/aでは広葉雑草にも有効であるとしたが、和歌山では発芽後のタマネギの生育がやや抑制されること(苗取り期には回復)、広葉雑草により有効という異なる成績を出しているため、試験例数の不足と結果の不一致のため再検討するという判定となった。

(1) **TCAA** (東亜農薬申請) : 継続

前出の薬剤の適用拡大試験で、園試盛岡支場、和歌山農試、広島農試可部園芸支場が担当した。その結果盛岡ではT.D.W-89と似た成績を収め、薬害のない点でNIPにまさるとしたが、和歌山はイネ科に対するすぐれた除草効果は認めたがNIPも薬害がないので特にこれに代える理由は疑問とし、広島では薬害・除草効果と薬量との間に一定の傾向がないことと生育初期の薬害から実用性なしとしている。このような結果の不一致と不安定によって試験継続と判定された。

(3) **CAPC** (アリセツプ) (北興化学申請)

: 生育期雑草処理 40 ~ 50 g / a で実用化

前出の薬剤で、前年も良い成績を収めたが、年次不足で再検討とされたものである。園試、岐阜農試、和歌山農試で担当したが、生育期(2~3葉)雑草処理で試験した結果、処理後1~2日後に葉先の黄変など若干薬害があったが実害はなく、除草効果が持続するうえ、広葉に有効なのでNIPにまさるという点ではほぼ一致した。したがって、前年の成績と合わせ生育期雑草処理 40 ~ 50 g / a で実用化と判定した。

(4) **シメトリン** (日本化薬申請) : 継続

トリアジン系の薬剤で前年からの継続試験である。非ホルモン型、吸収移行型の薬剤で、は種後処理試験を岐阜農試、大阪農技センター、兵庫農試淡路分場、佐賀農試で担当した。その結果、岐阜では除草効果は十分でないうえやや薬害あり、大阪は発芽後にやや現われる薬害は

実用的に問題ないが除草効果不十分、兵庫では除草効果はあるがNIPに劣るうえかなりの薬害がありとし、佐賀では高濃度で発芽が減じ初期生育も抑制されて採苗時の草たけも少なかったが総合して25 g / a で実用性ありと報告している。このように結果が一致しないので、試験場数を増して再検討と判定された。

(5) **CNP** (MO-338) (MO普及会申請) : 中止

前出の薬剤で、は種後処理を園試興津支場、香川農試、岐阜農試、兵庫農試淡路分場で検討した。その結果、除草効果はいずれにおいても著しかったが、黄化、ねん曲、枯死などの薬害もはなはだしく、中止と判定された。

13 **タマネギ** (本畑)

(1) **シメトリン** (日本化薬申請) : 継続?

前出の薬剤で、活着後および生育期の体系処理を岐阜農試と兵庫農試淡路分場で実施した。その結果、いずれも活着後処理では薬害を認めなかったが、生育期処理では葉先枯れなどの薬害が出た(実害なし)。しかし除草効果はCIPCに劣り、とくにイネ科雑草に対する効果が十分でなかった。生育期処理は効果の持続期間が4月までであった。以上の結果から効果のある処理時期と薬量の組み合わせを再検討する必要があるが、積極的に現行薬剤に代替するかどうかは疑問として、継続?と判定された。

(2) **S-4159** (住友化学申請) : 継続

前出の薬剤で継続試験である。愛知農総試験園、大阪農技センター、香川農試で担当し、活着後または生育期土壌処理を検討した。愛知で

は除草効果の高い点で生育期処理がよい、香川では活着後処理は薬害が著しいが生育期処理は薬害なく有望としたが、大阪は反対に殺草効果は活着後処理がよく生育期処理はみこみなし（薬害はない）としている。結果が全く反対なので再検討と判定された。

(3) S-4160（住友化学申請）：活着後および生育期各30g/a 2回処理で実用化
カーバメート系の薬剤で、継続試験である。殺草効果と抑制期間、薬害を体系処理で検討する試験を愛知農総試、大阪農技センター、香川農試で担当した。除草効果は十分であり、効果の持続を5月末までもたせるためには30g/aの体系処理が必要という点で成績が一致したので、実用化可と判定された。

(4) CNP（MO-338）（MO普及会申請）：継続？

前出の薬剤で、継続試験である。園試興津支場、岐阜農試、兵庫農試淡路分場、香川農試で活着後土壌処理を行なったが、興津では除草効果大であるが薬害からみて125cc/a以下で有望、岐阜はイネ科雑草には効果あるが持続性の点で1回処理では実用化低く、兵庫では150cc/aで除草力高く薬害なく実用性大、香川では岐阜と同様効果の疑問ありとしている。以上のように結果が一致しないので、薬量、処理時期（体系処理をするかどうか）について再検討が必要と判定されたが、積極的に有用と判断するかは問題という意味で継続？になった。

(5) MO-500（三井化学申請）：継続
前出の薬剤で、基礎的試験として園試興津支場が活着後土壌処理を行なった。処理後明らか

な薬害が出たが、次第に回復し、春期には差がなくなり増収になった。初年度であるうえ、薬害回復の経過にも疑問があるので継続と判定された。

(6) H-669（丸和物産申請）：活着後
18g/aおよび生育期12g/aの2
回処理で実用化

尿素系で非ホルモン性移行型薬剤を中心とする混合剤で、尿素系土壌処理剤に準ずる作用特性を持っている。継続適用試験で園試久留米支場、大阪農技センター、和歌山農試で担当した。処理活着後、生育期および両者の体系処理としたが、最低処理量（18g/a）でも著しい除草効果が認められた。生育期処理では薬害が生じたが後回復し実害はなかった。春雑草に対して、活着後処理のみでは効果が持続しなかった。これらの結果を総合して、薬害の防止、効果の持続を図る意味で、活着後18g/a生育期12g/aの体系処理で実用化と判定した。

14 チューリップ

(1) MUPC（アリプール）（北興化学申請）
：継続？

BIPCとOMUの混合剤で、イネ科雑草の殺草力の大きいテンサイ、ナタネ、ムギ用土壌処理剤で、作用特性としては、残効性のある発芽前処理剤で、深根性雑草や生育中の雑草には効果が劣るとされている。継続試験として新潟園試、富山農試礪波園芸分場が担当したが、新潟の成績は未了である。富山では30～50gで同薬量の植付後と早春生育期の体系処理を行ない、各処理量とも除草効果高く薬害を認めないので、30+30g/aで実用化の望みがあ

るとしているが、前年度の試験で開花期後に薬害を認めたことと今年の新潟の成績が不明なので、それをまち改めて判定するという意味で継続？とした。

(2) CAPC (アリセツブ) (北興化学申請)
：継続？

前出の薬剤で、新潟園試(未了)と富山農試礪波園芸分場が継続試験を担当した。植付後および植付後と生育期の体系処理を行ない、各区とも薬害はなく、除草効果は秋処理で大きいが春まで及ばないので体系処理が必要との結果を得た。薬量は $40 + 40 \text{ g/a}$ が良かったが、アリブール同様前年の試験で開花期に薬害があったことと新潟の成績が不明なので、それをまわって改めて検討するという意味で継続？とされた。

(3) シメトリン (日本化薬申請)：継続？

前出の薬剤で、チューリップについては新規試験である。植付後および生育中(春期)の土壤・雑草の体系処理を新潟園試および富山農試礪波園芸分場が担当した。新潟の成績は未了であるが、富山では春処理の1週間後から薬害が認められ開花期も1～2日遅れた。除草効果はスズメノカタビラ、スズメノテッポウには高かったがタデに劣った。薬害のあることとタデに対する効果の劣る点および新潟の結果が未着なので継続？とされた。

(4) MCC (スエツブ) (日産化学、日本農薬申請)：継続？

前出の薬剤でチューリップは新規試験である。新潟園試と富山農試礪波園芸分場で、植付後土壌または生育期雑草処理を実施した。新潟の成

績は未了であるが、富山では植付後処理では薬害がなかったが、春処理では1週間後から葉の黄変などの薬害が起こり、開花期も3～4日遅れた。除草効果は植付後処理の場合秋に限られ春のタデにきかなかったが、春処理では全般に効果があった。新潟の成績が未着なので、これを合わせて、処理適期と薬量を再検討するという意味で、継続？となった。

15 ユ リ

(1) MCC (スエツブ) (日産化学、日本農薬申請)：継続

前出の薬剤で、ユリに対しては新規試験である。山口農試と鹿児島農試で担当したが、処理は植付け後または発芽後土壌処理で、鹿児島の試験は未了である。山口では球根の入手がおくられて定植が低温期となったが、発芽後処理(4月)は十分な除草効果があり、植付時(12月)については雑草が少なく不明であった。薬害もないので対照のCIPCにまさると思われるが、鹿児島の成績が未了のうえ、試験年次も不足であり、これらの処理球を種球に使った翌年度の生育調査も必要と考えられるので、継続と判定された。

二 生育調節剤

1 キュウリ

(1) 2,4,5-TE (2,4-D協議会申請)
：継続

2,4,5-トリクロロフェノキシ酢酸イソプロピルエステルで、前年度にキュウリの曲り果防止効果を持つとして試験された薬剤であるが、

副次的に着果率の増加、果の生育促進的効果があるらしいと観察され、今年度はその効果を対象に試験が持たれた。前年に引きつづき埼玉園試が試験を担当したが、果実塗布、全面散布など処理を変え、効果と薬害を調査した。現地試験を含む3試験の結果から、子房処理により着果率の高まること、処理適期は開花後3日程度であること(作型で異なる?)全面散布は薬害が出るので不可などの成績を得たが、適正処理濃度などが未だ正確でないので(一応3000倍程度)、さらに試験例数を重ねるという意味で継続となった。

- (2) BCB(片山化学申請):土壌で育苗の場合 $5 \times 10^{-3} \sim 10^{-3}$ M, れき・くん炭育苗の場合は $1 \sim 5 \times 10^{-4}$ Mで実用化

2, プロモエチルトリメチルアンモニウムブロマイドで、前年来トマト、キュウリで育苗期施用による苗の生育抑制(わい化)効果の試験が行なわれてきた。園試久留米支場と徳島農試で実施されたが、両者とも9~15節(濃度で異なる)までの節間伸長が抑制され、雌花着生も促進されて著しい苗質改善効果ありと判断した。また収量もそれにつれて増加するとして実用性大としているので、前年の成績を合わせ、効果が培地によって若干左右される点を考慮し、土壌育苗では $5 \times 10^{-3} \sim 10^{-3}$ M, くん炭とれき育苗の場合は濃度を下げた $10^{-4} \sim 5 \times 10^{-4}$ Mの養液育苗で実用化可と判定した。

- (3) TO-Z-107(東洋高圧申請):継続

同社の開発した生育抑制(わい化)剤で、キクで著しい効果ありとされているものである。

園試興津支場と兵庫農試で試験したが、園試興津では、は種後35日から10日間隔で行なった2,000~6,000 ppm 液の1~4回処理の結果、実用化しうと思われる程度の節間伸長抑制効果を認めたが、本薬2枚程度の時期に散布すると薬害が大きいのので、第4葉期以後に第1回散布するなど処理時期を再検討すべしとしている。兵庫農試では4,000~6,000 ppm, 1~3回の処理を本葉五枚時以後に行ない、各処理ともわい化効果は認められるが、初期散布は薬害が大きいのので、4,000 ppm 以下を生育おう盛期(この試験では1月16日は種, 2月26日定植の場合4月6日以降)に処理するのが良いとしている。処理適期に差があるので、他場所での結果もあわせ、濃度、処理期について再検討するという意味で継続と判定された。

2 そ菜一般

(1) アルギット

北欧産海草を原料とし、肥料とともに施すと増収効果があるとして試験が依託された。埼玉園試(イチゴ、カンラン、ネギ苗床、カブ)、岐阜農試(カンラン)で試験を実施した。その結果、イチゴでは13%の増収、カンランでは1%(埼玉)、5~7%(岐阜)の増収、ネギ苗床では上苗本数8%増、カブでは0~17%増収との成績が得られた。試験担当者はアルギットの費用を考慮して、この程度の効果は特別のプラスと考えることはできないと判断し、実用性乏しと判定したが、成績を検討した結果わずかではあるがプラスになっていること、施用量と収量ほかの間に一定の傾向のないことなどから再検討の必要ありとして、継続の判定を下した。